

厚生福祉


 時事通信社

104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 時事通信社
 昭和28年5月30日 第3種郵便物認可
 毎週2回火・金曜日発行(但し祝日を除く)
 購読料金 税抜月額4,100円
 本誌掲載記事・写真などの無断複写、複製、転載を禁じます。
 ©時事通信社2017
 ◎誌面内容に関するお問い合わせ(編集部)
 kousei-dokusha@jiji.com

目次

特集	社会福祉法人の経営戦略(所感ノート)―その16 社会福祉法人の戦略課題……2
スコープ	介護保険見直し、急場しのぎか……5
中央省庁ニュース	……6
	医療費適正化自治体に増額 国保調整交付金見直し検討/空き店舗や遊休農地の活用推進 地方創生基本方針で原案/遊休不動産活用へ事例集 福祉や観光分野で
進言(京都市)	……7
準備できる福祉	……8
	国内初設置団体のノウハウ―石川県輪島市
地域を支える(佐賀県)	……10
私たちの工夫	……11
アクセシブルデザインの世界	第29回……12
学会・医療情報	……13
事件・事故・裁判	……14
地財計画と決算の比較検証が必要	……15
	基金増加の要因分析を一財政審建議
社説拝見	5月前期……16
ニュースフラッシュ	……18
	「子ども食堂」に補助金/保育士の奨学金返還に補助/保育事業に「わがまち特例」/1500人分の受け皿確保へ/公設民営の産婦人科医院を開設 ほか

がんの当事者になって

昨年11月に難治性のがんが発見された。前月まで元気で講演に飛び回り、海外旅行にも出かけていたので、まったく寝耳に水であった。がんの当事者になって分かったことがいろいろあった。

身内や知り合いにがんに罹ったり、がんで亡くなったたりした方が実に多い。ご自身ががんのサバイバーという方もいた。国民の2人に1人ががんに罹る時代なので当然かもしれないが、自分ががんになるまでびんときてはいなかった。がんに関する書物やネット情報、さらに口コミ情報も巷にあふれている。とりわけ、これのがんが治った、がんが消えたという類いの話は枚挙にいとまがない。がんとのつき合い方を示す本もある。何を信

岐阜医療科学大学・阿部順子
 名誉教授



じていいのか迷ってしまう。

一方、がん対策基本法が成立して以降だと思いが、診断から治療まで、ずいぶんシステムティックに運用されていることに驚いた。職場の健診で2次検査を指示され、近医を受診したところ、即専門医を紹介され、診断の確定までとんとん拍子に進んだ。主治医からは検査結果の説明を受け、治療方針を選択するように求められた。私がかもっていたがん告知のイメージはもつと重々しいもので、その後の治療方針も簡単には決められないと思っていた。が、標準治療はこういうもので、そのメリットとデメリットはかくかくしかじかで、日常生活の質を大事に考えると外来通院で副作用

があまり出ない範囲の治療が望ましいと淡々と説明されると、案外すんなり選択できた。

多くの方々から励ましの言葉を頂いた。がん細胞は、私のように難治性のもので比較的扱いやすいおとなしいものまで様々で、もちろん進行状態もいろいろである。にもかかわらず、がんの治療法は近年進歩しているから、治ると信じてがんばって闘ってほしいとの論調が圧倒的に多かった。もちろん悪気がないことは承知しているが、安易な気休めのように、押しつけがましく感じられた。家族の期待もプレッシャーだった。

エビデンスに基づいて執筆された当該領域の専門医の本を読み、自分の実感に近いと確信し、主治医の折々の説明もあつて、右往左往せずに治療・生活が送れるようになったのは3カ月が過ぎた後のことである。

地域を支える

885

社会福祉法人正和福祉会

特養、認定こども園など・佐賀県武雄市

高齢者と子どもの集う拠点を展開



山に囲まれたのどかな風景が広がる佐賀県武雄市。社会福祉法人正和福祉会は、同一敷地内で認定こども園と同園付属絵本図書館、特別養護老人ホーム、デイサービス、ケアハウスなどの高齢者施設を運営している。子どもたちと高齢者が日常生活の中で自然に交流できる場づくりに取り組んでいるのが特徴だ。総合施設長の馬渡芳憲さん(65)は「お年寄りや子どもの力を借りて生き生きする。子どももお年寄りとの触れ合いで成長していく」と説明する。

正和福祉会が保育園を始めたのは1949年。瑞応寺の住職だった馬渡さんの父、瑞芳さんが同寺で「芳華保育園」を開園したのが始まり。その後78年に社会福祉法人化、99年には「そよかぜの杜特別養護老人ホーム」の運営を始めた。

2015年6月、そよかぜの杜に隣接する土地に保育園を移転、敷地を橋でつなぎ、中庭を共有できるようにした。果樹が植えられた庭の中心には池があり、カモやヤギなどもある。高齢者と園児は年間を通して交流を重ねる。田んぼでもち米の苗を植えるときは高齢者に指導しても

らい、餅つきや夏祭りなどのイベントも一緒に行う。園児が中庭へ散歩に行った際に施設に立ち寄り、童謡を披露することもある。子どもたちは、高齢者からの温かい拍手に励まされるという。

こうした子どもと高齢者が一体となった活動について馬渡さんは、「お年寄りも庭で子どもが遊ぶ様子を見ることが元気をもらえる。時にはサクランボを取ってあげ、また一緒にウサギと遊ぶこともある」と説明。さらに「認知症の女性が赤ちゃんを抱っこすると、昔を思い出す表情で生き生きとし、血色が良くなる。一方で子どもも、鼻にチューブを通して高齢者や胃ろうで食事を取る方と触れ合うことで、『若い』や『死』を自然に理解し、周りの人を大切にする優しさが育つ」と高齢者と子どもが「傍ら」にいることの大切さと、その環境づくりの重要性を強調する。

絵本図書館「うらら(詩楽)の森」は15年4月開館。絵本を中心に約5000冊を所蔵。一般にも開放し、自由に本を借りることができる。敷地内では、こども園の保育士が子

育て支援サークル「ひだまりキッズランド」を毎週火曜日に開催。未就園児と保護者が交流し、離乳食教室など子育て相談の場となっている。また、学童保育「青空塾」も開設。地域支援や子育て支援に取り組んでいる。

正和福祉会では、絵本を高齢者にも生かしたいと、ソーシャルワーカーやケアマネジャーが中心となり取り組みを進める。施設内での読み聞かせでは、絵本が高齢者の心や尊厳を最後まで大事にするための媒介となってくれるのではと考え、ケアマネジャーと司書が寝たきりの高齢者に寄り添い一対一で絵本を読む。司書として勤務する佐藤由美さん(41)は県内初の絵本専門士。「高齢者支援に携わる専門家が中心となっているからこそできる取り組みだ」と説明する。

馬渡さんは、在宅の高齢者への活動も検討。「例えばヘルパーや司書が独居の高齢者を訪れて絵本を読むことで、安否確認ができ高齢者の楽しみとなる。そんな取り組みも考えたい」と今後の展開に思いをはせた。

〔中出範尚・佐賀支局〕